

〔2〕 学校研究

1 研究主題の設定理由

予測困難な未来を生きる子どもたちには、単なる知識の習得に留まらず、得た情報を統合して「どのように問題を解決できるか」という資質・能力が求められている。学校教育においても、実社会で生きて働く力としての資質・能力の育成は不可欠である。また、未来社会「Society 5.0」の実現に向けては、各教科において ICT を思考や創造のためのツールとして効果的に活用した授業の実践が欠かせない。さらに、社会構造が急激に変化する中、多様な価値観を前向きに受け止め、人間らしい感性を活かしつつ社会や人生を豊かにする姿勢が求められている。

一方、学校現場では、児童の背景が多様化し、学習の習熟度や家庭環境の違いによる学びの多様性が顕著になっている。こうした実態を踏まえ、児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた学習支援の充実が急務である。中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」においては、児童が自らの良さを認識し、他者を尊重しながら多様な人々と協働して社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く力の育成が示された。持続可能な社会の創り手を育てることは、我々に課せられた重要な使命である。

これらの資質・能力を育成するためには、学習指導要領が示す三つの柱である「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性等」の習得を目指し、「主体的・対話的で深い学び」を具現化することが不可欠である。教師が主導する従来の授業形態を脱却し、児童一人ひとりの特性に応じた指導・支援を行い、児童が主体的に授業に参画できるよう授業改善を進める必要がある。そのためには、児童が自律的に学習を進められる環境整備と、互いの考えを出し合い高め合う協働の場の設定が、これまで以上に重要となっている。

2 研究の方向性

昨年度、本校においては「主体的・協働的に学び合う子の育成～資質・能力の育成に向けた子ども主体の授業づくりを通して～」を研究主題に掲げ、児童の資質・能力を育むための研究を推進した。一昨年度までの国語科を核とした研究成果を基盤とし、特定の教科に限定せず全教科・領域を横断して主題の具現化を図った結果、教師と児童が「ゴールの姿」を共有することで、児童が自ら学び方を選択し、問いを持って課題解決に主体的に取り組む姿が見られた。その背景には、児童が自分のペースで学習を進められる環境整備や、ICT 機器の活用による他者との交流・学び合いの促進があり、これらは学習環境の充実と教職員の「子ども主体の授業づくり」への意識改革がもたらした大きな成果であると言える。

一方で、実践を通して新たな課題も浮き彫りとなった。一つ目は、交流の目的や視点を明確に提示できなかったことで、単なる意見交換に留まり、互いの考えをぶつけ合いながら新しい意味を生成するような、深い思考を伴う対話を引き出すまでには至らなかった点である。二つ目は「学びの土台」の定着であり、特に「聴く」という姿勢が依然として不十分なため、他者の考えを受け止めることで自らの思考が広がり深まるという、学び合いの本質的な良さを児童が実感するまでには至っていない。

これらの課題を解決するため、来年度は研究教科を国語科と算数科の二教科に絞り、指導の重点化を図る。本校が目指す協働的な学びをさらに進化させるためには、まず「学びの土台」を揺るぎないものにすることが不可欠であり、学級経営や人間関係づくりといった生徒指導の視点をこれまで以上に重視し、組織的な支援を進めていく。あわせて、教師の教材分析力を高めることで、各教科の特性に応じた「見方・考え方」を効果的に働かせ、交流の目的や視点をより鮮明に打ち出していく。そのためには、教職員一人ひとりの専門性や強みを活かし、ベテランと若手教員が密に協働して授業改善に取り組む体制を構築することが重要である。こうした組織的な営みを通じて授業力を向上させ、児童の資質・能力のさらなる育成を図っていく所存である。

3 研究主題及び副題

研究主題

主体的・協働的に学び合う子の育成 ～資質・能力の育成に向けた子供主体の授業づくりを通して～

4 研究用語の定義

- 「主体的」・・・・・・・・ 個の力。教材と向き合い、粘り強く「問い」から「解決」の往還すること。また、自己の学習ペースを考えて調整すること。
- 「協働的」・・・・・・・・ 集団の力。児童と児童の「伝え合い」、「教え合い」、「コミュニケーション」「情報交換」を通して学び合うこと。
- 「子供主体の授業」・・・ 児童が自ら問いを見出し、自分の選択した方法や手段で、解決していく授業のこと。
- 「学習環境」・・・・・・・・ 既習の学び、関連図書の位置付け。ノートやワークシートの工夫、ICTの活用など、児童が自ら問いを見出し、解決する手段や方法を想定した学習環境のこと。

5 学年研究を軸とした校内研究の推進

本校の研究主題に迫るためには、学年団の結束と協力が必要になる。それは、学年の児童の実態に応じた研究への手立てや指導の工夫が必要になってくるからである。教師個々の経験や指導方法だけでなく、学年団として多面的・多角的な視点で教材を研究し、目の前の児童に合ったオーダーメイド的な指導が必要である。さらに、柔軟かつ行動力がある若手教員と経験豊富であり、熟練の技をもつベテラン教員とが融合することで、校内研究のさらなる推進を図ることができる。

加えて、教材研究の際には、一部の教師が単独で計画し実施するのではなく、確かな資質・能力の育成を図るために、学年研究の時間を活用して単元構想を共有できるようにする。ICT活用に関する情報を交換し、学年全体で実践を積み上げるように協力していく。

学校全体	学年	
全体研究会（年5回） 全体研究授業（年3回）	学年研究会（隔週・火曜日） ・研究推進に関わるふり返り ・授業改善のふり返り ・朝学習の内容の確認 ・ICTの情報交換	単元構想シート作成 研究授業（学年で2名） ・事前授業 ・授業整理会
個人		
各種研修会 若プロ研修会	等	等

6 研究の重点

研究主題「主体的・協働的に学び合う子の育成」の具現化に向け、「協働的に学び合うための工夫」と「教科等の見方・考え方を働かせるための工夫」を研究の重点にする。学習基盤を定着させた上で、教科独自の「見方・考え方」に沿った話し合いの視点を明確にし、対話の質を深め、資質・能力の育成を図っていききたい。

また、児童一人ひとりの学びを見取るため、抽出児の具体的変容に基づいた「指導と評価の一体化」を推進する。また、言語スキルの向上や発達支持的生徒指導を重視した学級経営を基盤に据え、互いに高め合う学習集団づくりを一層深化させていききたい。

(1) 主体的に学ぶための工夫

児童が単元を通して、教材と向き合い、教材から問いを見出し、解決するための手立てを講じることで主体的に学ぶ児童を育成する。児童に付けたい資質・能力を明確にして、単元のねらいに迫れるように持続的な見通しもつことで、児童が単元を通して主体的に学ぶことができる。児童が主体的に学んでいくために、教科の特性に合わせた見方・考え方を働かせることや、確かな児童理解のもと指導の個別化を充実していくことが大切になってくる。

(2) 協働的に学び合うための工夫

一人では解決できない、誰かと学んだ方がおもしろいと感じ、必要感をもって協働的に学び合うことで協働的問題解決力の素地が育まれる。児童が個人で考える、複数で考える場や時を自己決定し、協働的に自己の問いを解決させていきたい。そのために、教科の特性に合わせた見方・考え方を働かせて協働する場面を設定し、協働的に学び合うことで学びを深められるようにする。視点や立場を明確にした必要感のある学び合いを通して、自分の考えを深めたり広げたりできるようにする。また、協働的に学び合えるように、効果的なICT活用も合わせて進めていきたい。

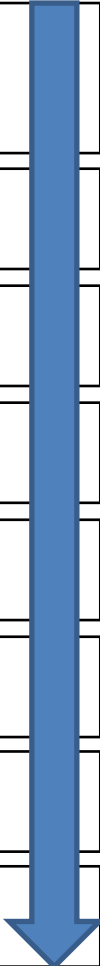
(3) 各教科等の見方・考え方を働かせるための工夫

主体的に学ぶためにも協働的に学び合うためにも教科の特性に合わせた見方・考え方を働かせることが大切である。そのために教師自身が単元を通して育みたい資質・能力をつけるためにどのような見方・考え方を働かせるか良いのかを児童と共有することが大切である。

(4) 全体研究会の設定

校内研究を計画的に推進するために、年度初めや年度末、学期の節目等に全体研究会を設定し、研究の成果と課題を短スパンで検証していく。以下のような流れで研究を推進していく。

4月	全体研究会Ⅰ（研究の概要） 児童の実態の把握（学習規律の徹底、学力の把握等） 蕪城授業デザインの共通理解
5月	全体研究会Ⅱ（提案授業・指導案の確認）
6月～7月	各学年の研究授業の実施 （事前研及び事後研にて、検証・分析）
8月	全体研究会Ⅲ（1学期の成果と課題・2学期からの方向性）
9月～12月	各学年の研究授業の実施 （事前研及び事後研にて、検証・分析）
1月	全体研究会Ⅳ（今年度の成果と課題） 研究紀要の構想
2月	全体研究会Ⅴ（次年度の学校研究の方向性） 研究紀要の作成
3月	研究紀要の完成



学校教育目標

自ら学び、心豊かで、たくましい児童の育成
～みんなが元気、みんなで前進～

白山市 指導の重点

- ・確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成
- ・地域に根ざした、特色ある学校の創造
- ・安全・安心な教育環境の整備

いしかわ学びの指針12か条プラス

- ・活用力を高める授業づくり
- ・学力・学習を支える基盤づくり
- ・指導改善を進める体制づくり

めざす児童像（教師の願い）

- ① 「自ら関わり学ぶ子」
自ら課題を発見し、他との関わりを通して、考えを広げたり、深めたりして学びを次につなげる子
- ② 「やさしく思いやりのある子」
規律正しく、相手の気持ちを理解しようと共感的に聴く、思いやりのある子
- ③ 「力いっぱい活動する子」
心身ともに健康でたくましく、活力のある子

【カリ・マネの柱】協働的問題解決力

主体的・協働的に学び合う子の育成

～資質・能力の育成に向けた子供主体の授業づくりを通して～

協働的に学ぶ工夫

- ・聴くことの良さを実感
- ・必要感のある協働場面
- ・学習環境
- ・学びを深めるための視点

児童の見取り

効果的な ICT 活用

教科等の見方・考え方を働かせるための工夫

- ・教材分析力の向上
- ・児童のゴールの姿
- ・学びを深めるための視点

学習の土台

- ・学習規律
- ・最後まで聞く
- ・話し方
- ・蕪城スタンダード
- ・反応の言語化

校内OJT・若プロ

授業力向上

生徒指導との連携

生徒指導の4つの視点

家庭学習の充実

家庭との連携

確かな児童理解にもとづく学級経営